

ローマの信徒への手紙 8:23-27 (新共同訳:新約 p284/和英聖書:新約 p371)

呻くことは

今日はロマ書の学びの第 73 回目です。お読みした聖書の箇所はローマの信徒への手紙 8:23-27 です。8:18-27 には、キリストを信じ従っている人には相変わらず苦難があって、それを 3 つの呻きとしてパウロが述べています。1 つめは「被造物の呻き (8:17-22)」でした。2 つめが「神の子たちの呻き (8:23-25)」です。3 つめの呻きは「聖霊の呻き (8:26-27)」です。前回と今日は、この 2 つめの「神の子たちの呻き」について学びます。つまり、イエス・キリストを信じ従っている私たちの呻きです。前回は 23 節だけを取り上げましたが、そのことも振り返りながら、今日は 25 節まで進んで行きます。では、まず 23 節を一緒にお読みしましょう。「(23)被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」まず冒頭で「被造物だけでなく…」とあります。これは 3 つの呻きの中の最初の呻きでした。被造物の呻きです。あるいは神さまが造られた自然界の呻きです。今を生きている私たちにとっても、この数十年の間に、様々な自然の呻きを見ることがありました。もちろん、これは被造物の呻きと言いながら人の呻きについて述べているのだよ！というお話をしました。では、呻きというのは無意味なものなの？という質問があるとすれば、そうではありません。呻きには意味がありました。要するに、パウロは「呻きというのは産みの苦しみなんだよー！」と言うのです。痛みを伴う苦しみを通してあとにやって来る、新しい命が生まれる喜びに繋がるんだよ！ということです。だから当然、今日のこの 23 節の冒頭で「被造物だけでなく」と言っているのは、「被造物だけではなく、キリストを信じ従う私たち神の子もまた呻いているのだよ！だけど、この私たちの呻きもまた、無意味ではないのだよ！これもまた、新しいものを生み出すための呻きなのだよ！」と言っているのです。まだ見ることのない希望に向かっている苦しみであって、「必ずそれは喜びに繋がることなのだ！」とパウロが言っているのです。そんな私たちは、キリストを信じた瞬間から「“霊”の初穂をいただいている」とあります。これは聖霊のことです。私たちがイエス・キリストを信じた瞬間に、私たちの心に神さまの恵みとして、いちばん最初に聖霊が初穂として与えられているのです。これは初穂なので、その後に続く数々の恵みが与えられる。その最初のものとして聖霊の保証が与えられているということです。では、私たちが初穂としての聖霊を受けて、その後に続く恵みとは何のことでしょうか。私たちが受ける最大の恵みは何でしょうか。それは、やがて息を引き取ってこの世を去ってから与えられる栄光の身体です。栄化の救いです。将来受ける救いです。私たちは、将来必

す救いが完成するということです。その保証が今からすでに与えられているのだよ！とパウロは言うわけです。ここに私たちの大いなる喜びがあるわけです。

クリスチャンとして

ところが、今から私たちの死後の世界の喜びが与えられることが約束されているにも関わらず、私たちは相変わらず、心の中で呻いているのです。要するに、クリスチャンというのは喜びながら呻いている人、あるいは、呻きながら喜んでいる人のことです。それを、また別の言い方をすると「地上を歩みながら天に国籍がある人」という言い方も出来るのです。もう一度言いますが、私たちは喜びながら呻いているのです。呻きながら喜んでいるのです。大切なことが何かと言うと、呻いているということはクリスチャンになっていない！とか、それは信仰が無いからだ！とか、呻いていることは救われていない証拠だ！ということではないということです。それは、私たちがロマ書の学びの中で沢山の時間を費やして学んで来たように、救いというものは先ず、過去の救いである義認・現在進行形の救いである聖化・将来受ける未来形の救いである栄化といったトータルで捉える必要があるのです。そのように救いというものをトータルバランスの中で受け止めて行く時に、栄化を目指して行く際には当然起こるべきクリスチャンの現象、それが呻きというものなのです。故に、呻くことこそ正常なのです。救いの完成を求めて行くプロセスとして呻きがある。だから、クリスチャンには呻きがあって当然であり、呻くことこそ正常なクリスチャンの在り方なのです。皆さんは、自分の心の奥底に何とも言えない、言葉に出来ない、時には意識すらしていないけど、「そう言われてみれば、確かに自分にも呻きがあるなあ！」と思うことがありますか。繰り返しますが、呻いているということは、クリスチャンとして正常な姿なのです。あるいは、洗礼を受けていなくても、キリストに従う者として呻きは正常なことです。その呻きは、救いの完成を求めて呻いているわけですが、パウロはより具体的に「体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」と言っていますね。「身体が購われることを待っている」と言います。身体が購われるというのは復活です。だから、私たちは今呻いているわけですが、それは復活の身体が与えられて、身体は火葬場で焼かれても霊は神さまの住まいに入れてもらって、キリストとの宴会に招かれる…私たちは、この喜びを呻きながら待ち望んでいる群れです。神さまがご計画になられた完璧な状態になる日を願いながら、今私たちは呻いているのです。私たちは新しい世界を待ち望んでいるお互いです。新世界を待ち望んでいるのです。新世界が出現するのです。新世界とは知っていますか？大阪の串カツ屋さんです。だから、大阪でこのメッセージするときは注意しなければいけない。「新世界が出現する！」と言うと、大阪の人は「おっ、串カツが出来るのか！」と勘違いしてしまいます。次に 24 節をご一緒にお読みしましょう。「(24) わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望

は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。」これは、もう読んで字のごとくです。私たちが救われたということは、希望に密接に関係しているということを言っているのです。私たちが救われた結果、私たちは身体が購われるという希望を持つようになったのだ！ということです。

正しい

ここで、横道に反れますが、私たちが救われるのは神さまが予定してくださったからです。神の予定です。エフェソの信徒への手紙 1:5 でパウロはこう述べています。「イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」これが神による予定です。私たちがイエス・キリストに繋がって神の子となることを前もって定めていた。前もって予定していたのです。だからこれは感謝ですね。イエス・キリストを信じた私たちお互いは、神さまが私たちを、予め選んで救いに定めていてくださったのだ！と言うのです。皆さんは、自分の自由意志で救いをもぎ取ったと思いますか？ご自分のことを考えてみてください。私もそうです。だいたい、私のように疑り深い人間が、見もしないことを信じる事が出来たというのは何と奇妙なことか！と思います。確かに、私たちは自分の自由意志を働かせて神さまに応答したのです。けど、もっと大きな文脈の中では、信じる事が出来るようにと神さまご自身が私たちを選んでいてくださったのです。これは感謝ではないですか？ホントにありがたいことです。そうでなければ、私のような人間が、見ていないものを信用するということはありません。これはホントにそうです。それは皆さんも同じだと思います。ある人は、こういう質問をします。「神さまが予め定めておられるのだったら、それは神さまが伝道していることなのだから、私たちは伝道する必要がないではないか！」と。ある意味、それはそうかも知れない。神さまが天使を遣わした方がよっぽど効率的です。天使だと分派分裂も無いし、競い合うことも無いわけですから、その方がスムーズな伝道が出来るでしょうね。だから神さまが来られて、「もう人間たちはよろしい！天使たちを遣わします！牧師たちは直ちに伝道をヤメて就職活動しなさい！」と、もし神さまが言ったならば、日本は1日でリバイバルが起こるハズです。日本の全人口がクリスチャンになることが出来ます。でも、それは神さまの方法ではないのです。神さまは、私たちのような不十分な者を予め選んで、不十分な者を愛されて、受け入れ、用いて、「キミが周りの人々に福音を伝えるように！」とご計画されたのです。これは感謝なことではありませんか。皆さん、もっと自覚しましょう。皆さんお1人おひとりを神さまが必要とされているのです。おうちでは、奥さんに「あら、アナタいたの？」なんて言われて、家の中では存在していることすら忘れられたとしても、安心してください。神さまはあなたを用いてくださっています。どんなに家族から疎外され、虐待を受け、辛い思いをして来られた人、それはホントに辛かったでしょう。でも、安心してください。そんなあなたを、神

さまは愛しておられます。人を殺めたり、盗みを働いた人であっても、一切の条件をつけることなく神さまは愛してくださっています。私たちはそのことに今、改めて思いをはせる必要があります。だから、余計な味付けをしないで、ストレートに「神はあなたを愛しておられるよ！」と言って、キリストは私のために死んでくださった！私のために墓に葬れた！そして私のために三日目に蘇られた！そして私を生かすために今も生きておられる！という福音の三要素を語って、「だから、あなたを愛してくださってることに応答して、信頼して生きて行こうではないか！」というのが、神さまに用いられている私たちの福音の伝達であります。それが、私たちは予め神さまの予定の中にあった！ということなのです。

姿なのだ

さて、最後に 25 節をご一緒にお読みしましょう。「(25)わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」苦難のときこそ希望が必要ですね。「目に見えないものを望む」というのは復活の望みのことです。復活の望みをもっている人は忍耐をもって待ち望むのだ！とパウロは言うのです。色んな人が、色んな動機で聖書を読みますね。いわゆる求道生活を始めますが、つきつめれば私が求道生活を始める根本的な動機は、前にもお話しましたが「死後の世界はあるのか？」というテーマでした。私は、「人は死んだらお終いだ！The End!」と思っていました。思っていたと言いか確信していました。でも、教会生活を始めて来て今は復活の望みをもって生きています。今、新型コロナウイルス感染がもの凄い勢いで世界中に広まっています。何か、恐怖映画でも見ているような錯覚にさえ陥ることもあれば、「あ～主よ！私たちのせいですよね！」という思いもいたします。私も、もう喘息を発症してから 10 年ぐらい経つでしょうか。だから新型コロナウイルスは怖いのです。この前、お話したみたいに私たちは、今生きているこの世界で生きていたい！と思っていますね。まるで卵の殻を破れないヒヨコです。殻の外の世界を知らないから、殻の中にいる方が心地いいわけです。でも、殻の外には希望に満ちた世界があって、そこからイエスさまが「大丈夫だよ！殻の中の苦しみは一時のものだよ！キミには希望に満ち溢れたパラダイスが待っているよ！」とイエスさまが叫んでいるのに、殻の中にいるのでイエスさまの声が聞こえなくなってしまうことがあるのです。今の日本の状態を見ると、一定期間でいいから都市封鎖しないとダメですね。自粛してください！というメッセージではもはや弱すぎます。小池都知事が言っているように、まさに今は国難です。こんな苦難の中にあるからこそ、私たちはますます聖書の言葉に傾聴して、しっかりと希望をもって行きたいものです。新型コロナウイルスも目に見えませんが、「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」まさに、このパウロの言葉は、今この国難の中にある私たちの言葉でもあるのです。